

ハルマゲドン考察 - 4 王たちへの召集令状の内容

このレポートは「ハルマゲドン考察」シリーズ 1/2/3 の続編という位置付けになります。

シリーズ3の中で、「ハルマゲドン」の戦場は「メギド」ではなく「シオンの山」に違いないと言う事書きました。今回のシリーズ4と5で、そのことを確証するさらに別の聖書的根拠を提示したいと思います。

今回はハルマゲドン直前の舞台に焦点を合わせたいと思います。

先ず、「北の王」すなわち「反キリスト」の最終場面から取りかかりましょう。

「しかし、東と北からの知らせが彼を脅かす。彼は、多くのものを絶滅しようとして、激しく怒って出て行く。」(ダニエル 11:44)

この記事では、この「東と北からの知らせに」注目します。

何故2箇所からなののでしょうか。その「知らせ」はどんな内容なのでしょうか。

「北」そして「東から」というフレーズで思い当たるのはイザヤ 41 章です。

「だれが、ひとりの者を東から起こし、彼の行く先々で勝利を収めさせるのか。彼の前に国々を渡し、王たちを踏みにじらせ、その剣で彼らをちりのようにし、その弓でわらのように吹き払う。彼は彼らを追い、まだ歩いて行ったことのない道を安全に通って行く。」

「わたしが北から人を起こすと、彼は来て、日の出る所から、わたしの名を呼ぶ。彼は長官たちをしっくいのように踏む。陶器師が粘土を踏みつけるように。」(イザヤ 41 : 2,3,25)

神によって起こされる、イスラエルをバビロニアの囚われから解放することになる、この「東」から起こされる「一人の者」はペルシャ人キュロス2世のことであると捉えて間違いないでしょう。

イラン人の一系統であるペルシア人のアケメネス家が、前550年、キュロス2世の時、それまで服属していたメディア王国を滅ぼして独立しました。その後急速に勢力を伸ばし、イラン高原から小アジア、インダス川流域にいたる帝国を建設しました。そして前538年には新バビロニアを滅ぼし、つぎのカンビュセス2世の前525年

にはエジプトを征服しました。前6世紀末のダリオス1世（大王）の時には全オリエントを支配する大帝国となりました。

まさに、預言されたとおりの破竹の勢いです。

特にバビロニア陥落の際、キュロスは、ユーフラテスの川を堰き止め、川床を通って難なく突入に成功します。「まだ歩いて行ったことのない道を安全に通って」という表現はこのことを指すのかもしれませんが。

ところで25節は、ちょっと分かりにくい描写です。「北から来て東[で]神を呼ぶ」ならまだ分かりますが、どうして北から起こして、東から神の名を呼ぶのでしょうか？他の翻訳も比較してみましよう。

「わたしは北から人を奮い立たせ、彼は来る。彼は日の昇るところからわたしの名を呼ぶ。」(新共同訳)

「わたしはひとり起して北からこさせ、わが名を呼ぶ者を東からこさせる。」(口語訳)

口語訳で読むと、北と東から別々の人が来るように読み取れますが、冒頭に「ひとりを」と述べられており、その後の「彼」も単数で表現されていますので、やはり「一人の人物」として扱っているようです。これはどういうことでしょうか？

冒頭の2節の方では「ひとりの者を東から起こす」と表現されているのに、25節では「北から人を起こす」としるされています。そして「東からの・・・」という描写が続きます。恐らく25節では、2節の更に詳細を述べたものと考えられます。

つまり2節の「一人の東からの」者という表現の中に「北からの」者も含まれているのでしよう。

おそらくこれは、厳密に言えば「二人」ですが、領土拡張やとりわけユダヤ人のバビロンからの帰還、エルサレムの神殿再建に関して主な働きをすることになるキュロスが「東からの者」であるゆえに「一人の東からの」という表現になっている。つまり実際には「二人一組」という事であろうと思われまます。

その実体は、2節の「東から起こす」人はすでに記したようにキュロス2世です。

そして25節で付け加えられた情報としての「北から起こす」人とはメディア人ダリヨス1世のことに違いありません。

バビロンの元に居たダニエルに現れたみ使いは、キュロスではなくダリヨスに言及しています。

「私はメディア人ダリヨスの元年に、彼を強くし、彼を力づけるために立ち上がった。」
(ダニエル 11:1)

この点を歴史的な流れで見ると、

「ペルシャ王のクロスの第一年」すなわち、紀元前 538 年に捕囚からの帰還を許され、神殿の再建に取り掛かりますが、周辺の敵に妨害され工事が中止されてしまいます。それは、ペルシャによって任じられた一部の役人が、ゼルバベルの時代のユダヤ人による神殿再建の業の適法性に異議を差しはさんだからでした。

その際に、これらの反対者は、ペルシャの王ダリウス 1 世に書簡を送り、再建を認可したキュロスの勅令の有無を確認して欲しいむね要請しました。(エズラ 5:1 - 17)

ダリウスが調査を行なわせた結果、エクバタナでキュロスの勅令が発見され、こうして神殿再建の業の適法性が確認されました。事実、ダリウスは命令を下して、ユダヤ人の仕事が妨害を受けることなく続けられるように、さらに、ユダヤ人に必要な物資を供給することまで命じ、彼らはそれを『速やかに行ない』ました。

「こうして、この宮はダリヨス王の治世の第六年、アダル月の三日に完成した。神殿はついに、「太陰月アダルの三日までに、すなわち王ダリウスの治世の第六年」、つまり西暦前 515 年の春になりかかるころに完成されました。」(エズラ 6:1-15)

このキュロスへの約束と保証の言葉はエズラ 1:1-3 に記されています。

「ペルシャの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシャの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。

ペルシャの王クロスは言う。『天の神、主(ヤハウエ)は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。

あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。』

このように、キュロス王は「東から起こされ」主の名を呼びました。

説明が長くなりましたが、「二人一組」と表したのは、ダリヨス 1 世とキュロス 2 世の共同統治であり、例外的な政体を特とする「メディア・ペルシャ帝国」を表すもの

であったということです。

これでひとまず、

「北」=メディア人ダリヨス 1 世

「東」=ペルシャ人キュロス 2 世

イザヤ書における「北と東から」という表現についての決着がついたとします。

さて、ではこれは、ダニエル 11 章の「北の王」のもとに届いた「知らせ」の源とどんな関係があるのでしょうか。

「しかし、東と北からの知らせが彼を脅かす。彼は、多くのものを絶滅しようとして、激しく怒って出て行く。」(ダニエル 11:44)

ここで「脅かす」と訳されている語は、ヘ語：「バハル」で、「失望、落胆 恐怖、邪魔、驚愕」など広い意味があるようです。

「北の王」を激しく怒らせる知らせとはどんなものなのでしょう？

「知らせ」の出处を探る前にまず、その内容について推察してみます。

その内容が「多くのものを絶滅しよう」という直接の動機づけを与えるようなものなのでしょう。

少なくともそれは、彼をエルサレムに向かわせる理由となるようなものだということは想像に難くありません。

しかし彼は、エルサレムを激しく憎んでおり、それまでも度々攻撃をしかけています。

状況から言ってこの出来事のタイミングは、後半の 3 時半の最終部分、すでに大患難も終わった直後か、間もなく終わろうとしているという時点、つまりハルマゲドンにおける神との戦争に向けての行動と思われるので、北の王が一番乗りということでしょう。

ということは、その「知らせ」は、諸国の王たちを招集するための同じ内容の「知らせ」なのでしょう？

しかし、そうであれば、その音信の出处は、龍と野獣と偽預言者の口から出るので、「北の王」自身もその「知らせ」の源ということになります。

「また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。」(黙示 16:13)

この霊は印を行う悪霊たちの霊であると言われていしますので、諸国の王たちを納得させ、その気にさせるような超自然的な業を伴った招集活動であり、その内容は、サタンの狡猾な、プロパガンダ的なものに違いありません。

ですから、「北の王」が受け取った知らせと「諸国の王たち」に向けられる内容とが同じものということは考えられません。

ここで、タイミング的に同時期に生じている他の出来事を聖書中から調べれば、この時、おそらく北アフリカに遠征中であつたと思える北の王に伝達されたであろう事件の内容を推し量ることができるかもしれません。

そこで注目できるのが、黙示 11 章の「二人の証人」の記述です。

「しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らにはいり、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ。と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。 彼らの敵はそれを見た。そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。」(黙示 11:11-13)

「大患難」を含め、それまでの出来事は、全世界のほとんど人にはすべて「人為的」な出来事にしか見えないと考えられますが、キリスト再臨直前の、このいわゆる「携挙」と表現される、至るところで身近な人間が突如、天に挙げられるという、否応なく認めざるを得ない神がかり的な出来事に、驚愕することになります。

この話は「北の王」にとっては捨て置けないでしょう。

これらすべてを「無かったことに」しなければ最終的な目的は達成できないでしょうから、エルサレムに登り、「多くのものを絶滅しよう」とするのでしょう。

そして、それはエルサレムはもとより、つまり世界的な規模で、この出来事を見た人、知っている人、信じた人々を抹殺するために、全知の王たちの元に通達がゆくということでしょう。

さて、もう一つ問題が残っていました。

「北の王」を脅かす「北からの知らせ」を送ったのは誰でしょうか？

身内からの警告、勧告でしょうか？

であるなら、「東」からとはどういうことでしょうか。

なぜ異なる方角の2箇所から来るのでしょうか？

一般に、この聖句について、様々な宗派の研究者やサイト管理人のブログなどには、「ロシア」とか「中国」とかいう名称が上がっていますが、この時点で諸国家はほとんど一心同体で、その北であれ東であれ、その存在や行動自体が「北の王」を戦かせることにはないはずで

やはり、この「知らせ」は「北の王」の同士であり、スポークスマンであり、マネージャーのような、「偽預言者」に他ならないでしょう。

偽預言者とは、黙示録13章で「海から上がる獣」の後に「2本の角のある地から上がる獣」として登場した者で、この獣(666)をバックアップして崇拝させようとする強力なサポーターです。

この偽預言者の実体は、これまでの記事で現代における「メディア・ペルシャ」であると示して来ました。

(詳しくは「83 終末期の悪の主演ーギリシャの君とペルシャの君」)

「85 反キリストは「シリア」、偽預言者は「イラン」であるという根拠」をご覧ください)

結論ですが、ダニエル11:44の「北の王」を脅かす知らせを届けた「北と東から」の「知らせ」の源は、現代のペルシャ、つまり(おそらく)イラン(の元首)と古代メディア王国の現代版のマスメディアとのチームワークからなる「偽預言者」であろうと考えます。

(この古代メディア王国と現代のマスメディアとの関係については近いうちに書く予定です。)

[つづく]

ダニエル11:45の内容を扱った「ハルマゲドン考察 4ー集結場所は、ヨシャパテの谷」に続きます。